

森春濤「十一月十六日舉兒」詩考

日野俊彦

初めに

森春濤⁽¹⁾（文政二年、一八一九〜明治二十七年、一八八九）の「十一月十六日學兒（十一月十六日 兒を學ぐ）」詩は、蘇軾⁽²⁾（景祐三年、一〇三六〜建中靖國元年、一一〇一）の「洗兒戲作」、錢謙益⁽³⁾（萬曆十年、一五八二〜康熙三年、一六六四）の「反東坡洗兒詩」を踏まえつつ、蘇・錢両者に自らを重ね合わせ、感慨を詠った作品である。この論文ではまず蘇軾・錢謙益それぞれの作品成立についての経緯を述べ、春濤の幕末における交遊から、この作品の意味を捉えようとするものである。最後に春濤における清詩受容についての管見を述べたい。

一、二つの「洗兒」詩

元豐二年、蘇軾は彼の詩が當時の政治に對する批判、延いては朝廷に對する非難であるとの罪狀により、官吏の監察・裁判を司る御史臺の厳しい尋問・詮議を受け、名目上の官位はあるものの、實質は黃州への流罪となった。蘇軾はこの拘束の中で死罪の可能性を考え、逮捕直後のことを後に、「臣即ち妻子訣別、留書與弟轍、處置後事、自期必死。」（臣即ち妻子と訣別し、書を留めて弟轍に與へ、後事を處置して、自ら必ず死なんと期す。）と述懐している⁽⁴⁾。死を免れはしたが、その衝撃は大きいものであったろう。結審後、御史臺の獄を出た蘇軾は次の二首を作っている。

十二月二十八日蒙恩責授檢校水部員外郎黃州團練副使復用前韻⁽⁵⁾ 其一

十二月二十八日 恩を蒙りて檢校水部員外郎黃州團練副使を責授せらる 復た前韻を用う 其一

百日歸期恰及春 百日の歸期 恰かも春に及び

餘年樂事最關身 餘年の樂事 最も身に關はる

出門便旋風吹面 門を出でて便旋すれば 風は面を吹き

走馬聯翩鵲啁人 馬を走らせば聯翩として 鵲は人に啁し

却對酒杯渾似夢 却って酒杯に對すれば 渾て夢の似く

試拈詩筆已如神 試みに詩筆を拈れば 已に神の如し

此災何必深追咎 此の災 何ぞ必ずしも深く追咎せん

竊祿從來豈有因 竊祿 從來 豈因有らんや

其二

平生文字爲吾累 平生 文字 吾が累を爲す

此去聲名不厭低 此に聲名を去りて 低きを厭はじ

塞上縱歸他日馬 塞上 縱ひ他日の馬に歸するも

城東不闘少年鷄 城東 少年の鷄を闘はせじ

休官彭澤貧無酒 官を休めし彭澤 貧にして酒無く

隱几維摩病有妻 几に隱る維摩 病にして妻有り

堪笑睢陽老從事 笑ふに堪へたり 睢陽の老従事の

爲余投檄向江西 余が爲に檄を投じて江西に向かふことを

「此の災 何ぞ必ずしも深く追咎せん 竊祿 從來 豈因有らんや」「平生 文字 吾が累を爲す」とは、その苦澁

を充分に傳え得るものである。また、黃州到着後に作った「初到黃州」⁽⁶⁾の中においても、「自笑平生爲口忙（自ら平生の口が爲に忙しきを笑ふ）」としている。しかし、この黃州への流謫においても、蘇軾は「前赤壁賦」「後赤壁賦」のような名作を生み出し、さらに元豐六年、四十八歳の時、この流謫の地で、妾の朝雲との間に一子を儲けた。「洗兒戲作」はこのような苦澁を経ながらも、新たな生を得た喜びを詠った作品である。

洗兒戲作⁽⁷⁾ 洗兒に戯れて作る

人皆養子望聰明 人皆な子を養ふに聰明ならんことを望むも

我被聰明誤一生 我 聰明のために 一生を誤るを被る

惟願孩兒愚且魯 惟だ願はくは 孩兒の愚にして且つ魯

無災無難到公卿 災無く難無くして 公卿に到らんことを

人は皆、子供を「聰明であるように」と望みながら育てているが、私はその聰明さゆえにこのように間違った人生を歩むこととなった。ただ私はこの幼子に愚かで鈍くあっても、災難無く高官となってくれることを願うのである。

洗兒とは北宋時代の風俗を記した『東京夢華錄』⁽⁸⁾育子の條に、「至滿月大展洗兒會、親賓盛集。浴兒畢、落胎髮、遍謝座客、致宴享焉。（滿月に至るに大いに洗兒の會を展じ、親賓盛んに集ふ。浴兒畢るに、胎髮を落とし、遍く座客に謝し、宴享を致す）」とあるように、子供のお披露目の催しである。おそらく蘇軾もこの祝い事を行い、その際に詠まれたものであろう。蘇軾はこの時既に三人の男子がいたが、この子の誕生の喜びは一入であったらしく、その頃に送った手紙の中で、「雲藍小袖者近輒生一子。想聞之、一拊掌也。（雲藍小袖は近ごろ輒ち一子を生めり。之を想

聞するに、一に拊掌せり——朝雲が近ごろ子供を一人生みました。この子をいとおしく思う度に、いつも手を打って喜んでいます——」と記している。⁽⁹⁾

一方、蘇軾に比べると、錢謙益の我が子に寄せる思いを伝える資料は少ない。その生涯については、注で示したものの以外に吉川幸次郎の論文でかいま見ることができる。吉川の「錢謙益と東林——政客としての錢謙益——」の中に次のような箇所がある。⁽¹⁰⁾

一六二七、天啓七年の八月に、熹宗が崩じたことは、それをとりまく魏忠賢勢力の没落であり、忠賢の圧迫を受けて来た牧齋らの抬頭の機会であった。まず原官を復された彼は、翌崇禎元年四十七歳の七月、北京政府に帰り、詹事を経て礼部右侍郎にすすんだ。更にその年の十月、政権の中央に位する内閣閣僚の選考にあたっては、首相のもつとも有力な候補者として、自他ともにゆるした。しかし選考のための御前会議の当日、温体仁の不意うちの発言によって形勢は一転し、入閣の希望を達しなかつたばかりか、「蓋世の神奸、朋党の巨魁」として、再び官吏の身分をうばわれ、裁判を受けることとなった。いわゆる「閣訟」である。翌崇禎二年、一応無罪となったが、その六月には、孤影悄然として四たび常熟に帰った。在朝一年有余であり、第四の挫折である。

「反東坡洗兒詩」はこの「第四の挫折」により、故郷の常熟に帰って間もない、錢謙益四十八歳の作である。

反東坡洗兒詩 己巳九月九日⁽¹¹⁾ 反東坡洗兒詩 己巳九月九日

坡公養子怕聰明 坡公 子を養ふに聰明なるを怕るるも

我爲痴獸誤一生 我 痴獸のために 一生を誤る

還願生兒猥且巧 還た願はくは 生兒の猥にして且つ巧

鑽天驀地到公卿 天を鑽り地を驀して 公卿に到らんことを

蘇軾殿はご自分が聰明なるがゆえに、誤った人生を歩むことになったとして、子供が成長して、聰明にならないよう心配をされていたが、私は愚か者ゆえ、誤った人生を歩むこととなった。やはり私は我が子がすばしく、上手な生き方をして、天を貫き地を越える勢いで、高官となってくれることを願うのである。

錢謙益は蘇軾とは反対に子供に恵まれず、この詩を作る五年前に一子を儲けたが、わずか四歳で夭折している。その子供の墓誌銘、「亡兒壽考壙志」⁽¹²⁾の冒頭は次のように記している。

嗚呼、我先君與余皆單子。余妻生子佛霖殤。妾王氏生檀僧亦殤。

ああ、我が先君と余は皆單子なり。余の妻、子佛霖を生むも殤す。妾王氏、檀僧を生むも亦た殤す。

錢謙益が「反東坡洗兒詩」を作るに至ったのは、奇しくも同じ年齢に一子、しかも後継ぎとなる男兒を儲けたこと、そして、當時それぞれが置かれていた状況が酷似していたためであろう。但し、春濤が錢謙益の生涯・詩文についてどこまで通じていたかについては、一考を要する。これについては、後に管見を述べることとしたい。

二、森春濤の「洗兒」詩

春濤の「十一月十六日舉兒」詩成立については、春濤自身の家庭内での問題、そして當時の彼を取り巻く時代の變動の二つの側面から考察を加えなければならない。

春濤自身の家庭内での問題については、既に拙論において述べたことがあるが、春濤はこの詩を作った文久三年の時点には、最初の妻、二番目の妻に先立たれ、三番目の妻も前年に迎えたばかり、長男を病にて失い、次男はまだ乳飲み子という状態となっていた。特に萬延元年、將來を囑望していた長男、森一郎の死は春濤にとって大きな痛手となっていた。後にも述べるが、春濤が京都に赴き、梁川星巖や星巖の弟子である頼支峰・三樹三郎兄弟、家里松嶮、池内陶所らとの交際がありながらも、幕末の動亂に自ら進んで係わりあうことがなかったのは、春濤の置かれた社会における立場や彼自身の能力もさることながら、やはり家を継ぐ者がまだ幼く、後々の家の存続が不安定であるということが大きな要因であった。

この春濤の京都市行は、安政三年のことであるが、春濤の案内役となったのが藤本鐵石（文化十三年、一八一六〜文久三年、一八六三。名は眞金、字は鑄公、號は鐵石、都門賣菜翁など。）である。春濤が鐵石と初めて出会ったのはその前年であり、その時、春濤は「旗橋村店送鐵石山人游美濃（旗橋村店にて鐵石山人の美濃に游ぶを送る）」を詠んでいる。また、「十月望日藤本鐵石見過」「送藤本鑄公游京師（藤本鑄公の京師に游ぶを送る）」は春濤が京都に向かう直前の作である。ここでは「十月望日藤本鐵石見過」を見る。

十月望日藤本鐵石見過¹⁴ 十月望日 藤本鐵石過らる

坡老後游當是夕 坡老の後游 當に是の夕なるべし

一尊謀婦情初適 一尊 婦に謀れば 情 初めて適ふ

雖無巨口細鱗肴 巨口細鱗の肴無しと雖も

偶有玄裳縞衣客 偶ま玄裳縞衣の客有り

幽窈入窗天月寒 幽窈 窗に入りて天月寒く

杳茫橫水夜山白 杳茫 水に横たはりて夜山白し

勸君須盡手中杯 君に勸む 須らく盡くせ手中の杯

此會明朝又陳迹 此の會 明朝 又た陳迹たらん

「幽窈入窗天月寒」「杳茫橫水夜山白」は「赤壁賦」から、「一尊謀婦」「巨口細鱗」「玄裳縞衣」は「後赤壁賦」からと、蘇軾の二つの賦を併せて一つにしたかの如き詩である。また、鐵石との交友、京都での春濤の様子については、春濤の没後に編まれた『森春濤先生事略』に次のような箇所がある。¹⁵ それに續けて「十一月十六日舉兒」——このとき生まれた子が、後に明治後期の漢詩壇を代表する槐南森泰二郎である——を擧げる。この詩は二首よりなっている。

藤本鐵石自ら都門賣菜翁を稱し、書畫を以て近畿を歷游し、來て先生の居松雨莊に寓する者數月。其緣故を以て先生の京師に入るや、先づ藤本氏が富小路の居に至る。時に鐵石一貧洗ふが如く、僅かに賢妻の衣飾を典ずるに頼りて過活するを得るの有様なり。先生の京に入る、實に鐵石氏に由て東道の主人たらんことを豫期せしと雖、今鐵石氏的情實如此なるを見て、茫然措く所を知らず。(中略) 春濤が自らの所持金等にて鐵石の生活を助けたことを) 後來鐵石氏が十津川の事を擧ぐるに臨んで、猶此時の恩誼感泣の外なく、生々忘れざる旨の書翰一あり。今家に存す。先生の京にあるや、首として贄を梁川星巖先生の門に取り、其弟子の列に加はる。是に於てか當時の名士、賴支峰三樹兄弟、家里松嶠、池内陶所等皆莫逆の交を結ぶ。(中略) 星巖先生、常に先生の寒村に在て醫業に従事せるを惜み、屢々書を以て速かに京都に移住し、門戸を張らんことを勸む。松嶠、鐵石の諸家

も亦頻々之を勧誘せり。先生も意を決し、將に移住せんとするに際し、元配服部孺人卒し、相次て最愛の長子螢窓雪童亦歿す。此餘家中の不幸打續き、終に宿志を果たさず、幾ばくも無くして、局勢一變、先生京師の知己大半は間部侯が一網の下に打盡せられ、斷頭場裡の露と化するもの亦少なからず、嗚呼先生をして不幸なからしめば、定て京師マに在て諸志士と相合し、若し黨人の獄に入らずんば、必ず十津川の變事に與かるべし。

十一月十六日舉兒¹⁶ 十一月十六日 兒を舉ぐ

昨來熊夢忽呈祥 昨來 熊夢ありて 忽ち祥を呈す

雪有珠光月寶光 雪に珠光有り 月に寶光

無乃逋仙親抱送 乃ち逋仙の親しく抱き送ること無からんや

早梅花底繡繡香 早梅の花底 繡繡香し

つい昨日、男子を産む吉兆である熊の出てくる夢を見ると、すぐにそのご利益が現れた。雪も月も美しい光を放つこの日、おそらく梅を妻とした林逋仙人が愛情を以てこの世に送り届けてくれたのであろう。早咲きの梅の元、わが子の襁褓も芳しい。

偏怕聰明徒自激 偏へに聰明を怕るれば 徒らに自ら激し

謾求情巧失其宜 謾りに情巧を求むれば 其の宜しきを失ふ

公卿有種非吾分 公卿 種有り 吾が分に非ず

休誦虞山反洗兒 誦ふを休めよ 虞山の反洗兒

我が子が、蘇軾のように聰明になって一生を誤るのではないかとひたすらに心配すれば、空しく自分の心を奮

い立たせることになり、錢謙益のようにすばっしっこく上手な生き方をしてくれるようにと、そう思ってもどうなる譯でもなく、我ながら馬鹿げたことと知りつつも願えば、身の程知らずとなってしまふ。高官になれるような人は元々そうなる生まれつきであり、それは私のような身の程ではない。だから「まっしぐらに高官に上り詰めて欲しい。」と詠った錢謙益の詩を聲に出して讀むのはやめることにしよう。

安政五年に梁川星巖は病死、同年より起きた安政の大獄では頼三樹三郎が刑死している。そして、「十一月十六日學兒」を詠んだ文久三年は五月に家里松嶠の暗殺、九月に藤本鐵石が天誅組の亂で敗死している。春濤はこの時四五歳。蘇軾「洗兒戲作」錢謙益「反東坡洗兒詩」はともに四十八歳の作と年齢が近いことも作品の動機として大きな位置を占めよう。それ以上に、蘇軾は元祐黨、錢謙益は東林黨といずれも當時の體制を批判する意識を持った集團にあった。但し、春濤は後に尾張藩校明倫館に二年間仕えた他は、その一生を何かしらの社會制度に組み込まれた集團・組織に加わることはなく、また、科擧に合格して、士大夫としての道を全うした蘇軾・錢謙益、あるいは武士階級であった藤本鐵石・頼三樹三郎らともその立場は明かに異なるものであった。春濤が藤本鐵石や、頼三樹三郎らのような尊王派と思想や立場を共有したかは定かではない。しかし、この「十一月十六日學兒」にある彼らに對する感慨——それが共感であるか、反感であるか、あるいは兩者にも立たないか、立ち得なかったかは別として——を踏まえることによってこそ、この詩を讀み解くことができよう。

結語に代えて——森春濤の清詩受容についての「管見」——

春濤はどのようにして、蘇軾や錢謙益の詩を知り得たのであろうか。蘇軾については、古くから日本において愛好

されており、江戸期に出された蘇軾詩の選本にも「洗兒戲作」は見えていたので、ここでは取り上げない。一方、錢謙益については、蘇軾に較べるとかなりその受容を探ることは難しい。ここでは尾張近郊の一町醫者が清から輸入された書籍を直に手に入れることは相當に困難と判断されるので、より受容の可能性の高い和刻本から、この問題について考えるのが適當であろう。⁽¹⁸⁾長澤規矩也『和刻本漢籍分類目錄』⁽¹⁹⁾及び『同補正』⁽²⁰⁾、同編『和刻本漢詩集成 總集編』⁽²¹⁾解題に基づき、春濤が實見し得る錢謙益の詩が含まれている漢詩集を挙げる。

- 1、清詩選「絶句抄」 孫鉉編 藤淵選 寶曆四年刊
- 2、清詩選選 孫鉉編 坂倉通貫選 片岡正英校 寶曆五年刊
- 3、清詩選 奥田元繼選 高岡公恭編 享和三年刊
- 4、清百家絶句 村瀬娶等編 頼襄刪 文化十二年刊
- 5、清十名家絶句 服部孝編 嘉永六年刊

1は筆者は未見であるが、2と5は『和刻本漢詩集成 總集編』に收められているので、容易に見ることができ⁽²²⁾る。また、1と2はともに孫鉉編『皇清詩選』⁽²³⁾から、3は沈德潛『國朝詩別裁集(清詩別裁集)⁽²⁴⁾』・王士禛『感舊集』⁽²⁵⁾からの選集である。4・5は何に依據したかを明示しない。この中で「反東坡洗兒詩」が收められているのは、『清十名家絶句』のみである。しかも、『清十名家絶句』は春濤と同郷で友人の大沼枕山による校閲であり、編者の服部孝(字は樂山)とは面識があったから、春濤はこれを見ることができたであろう。⁽²⁶⁾

では、さらに『清十名家絶句』の錢謙益詩は、何に依據したかを考えたい。『清十名家絶句』の枕山による序文は、「嘗採清人諸集、反復熟讀、得十家焉。(嘗て清人諸集を採り、反復熟讀し、十家を得)」とのみ記す。そこで、收め

られた詩の題目を挙げ、錢謙益の詩集『初學集』『有學集』の卷數を併記する。

徐州雜題 『初學集』卷一

惆悵詞 『初學集』卷三

蛺蝶詞 『初學集』卷三

柳絮詞 『初學集』卷四

無花 『初學集』卷七

引壺觴以自酌至審容膝之易安用韻 『初學集』卷七

閏四月廿三日夢中作 『初學集』卷七

反東坡洗兒詩 『初學集』卷九

宋比玉將行留別和詩 『初學集』卷九

柳枝辭 『初學集』卷十一

荷花辭 『初學集』卷十一

渭南梁生爲餘寫眞題二絕句 『初學集』卷十二

戲書梅花集句 『初學集』卷十三

春夜聽歌贈秀姬 『初學集』卷十六

雜憶詩 『初學集』卷十七

陌上花樂府三首東坡記吳越王妃事也臨安道中感而和之和其詞反其意以有寄爲 『初學集』卷十八

禊後五日浴湯池留題 『初學集』 卷十九

留惠香 『初學集』 卷二十

代惠香答 『初學集』 卷二十

燈下看內人插瓶花戲題 『初學集』 卷二十

丙申春就醫秦淮寓丁家水閣浹兩月臨行作 『有學集』 卷六

題僧卷 『有學集』 卷五

題鄒臣帟畫扇 『有學集』 卷五

題目及び各集の巻數を見ると、第一に『初學集』『有學集』それぞれの採用數に明かな不均衡があること。第二に『初學集』は巻數通りに配列されているのに對し、『有學集』の配列には亂れがあることがわかる。しかも、『初學集』は第一巻から第二十巻、『有學集』は第一巻から第十三巻に詩が收められている。採用された詩では『初學集』はほぼ各巻から一首は採られているが、『有學集』は各巻に收められた詩の數を考慮に入れないとしても、明かに少なく、巻五と六のみという偏頗な構成となっている。依據を明示していない以上、推論の域を出ないが、服部樂山が編集する際においては、『有學集』を見ず、『初學集』と何らかの選本によって構成した可能性が考えられよう。後の明治十六年に『初學集』『有學集』の和刻本が出版される。また、明治十一年には春濤らの選になる『清廿四家詩』が出版され、明治期の漢詩壇における清詩の受容は大きくなってゆく。この點から見れば、『清十名家絶句』は春濤の清詩受容について看過できない書籍と言えよう。

注

- (1) 春濤の生涯については、次の資料によった。
- 『有隣舎と其學徒』、石黒萬逸郎、一宮高等女學校校友會、一九二五年二月
- 『下谷叢話』、永井荷風、岩波書店（岩波文庫）、二〇〇〇年九月
- 『森春濤詩抄』、後藤利光、一宮史談會（私家版）、一九八〇年三月
- 『明治漢詩文集』（明治文學全集六二）、神田喜一郎編、筑摩書房、一九八三年八月
- 『近代文學としての明治漢詩』、入谷仙介、研文出版、一九八九年二月
- 『明治の文雅 森春濤をめぐる漢詩人たち』展圖録、一宮市立博物館編、二〇〇二年七月
- また、詩集は『春濤詩鈔』（文會堂書店、大正元年五月）を用いた。なお、これは富士川英郎「ほか」編『詩集 日本漢詩』第十九卷（汲古書院、一九八九年七月）に收められている。
- (2) 蘇軾の詩文・資料は次のものを用いた。
- 『蘇軾詩集』、王文誥輯註・孔凡禮點校、中華書局、一九八二年二月
- 『蘇軾文集』、孔凡禮點校、中華書局、一九八六年三月
- 『蘇軾年譜』、孔凡禮、中華書局、一九九八年二月
- (3) 錢謙益の詩文・資料は次のものを用いた。
- 『錢牧齋全集』、錢仲聯校注、上海古籍出版社、二〇〇三年十一月
- 『清錢牧齋先生謙益年譜』（新編中國名人年譜集成第十三輯）、葛萬里編、臺灣商務印書館、一九八一年四月
- (4) 「杭州召還乞郡狀」（『蘇軾文集』卷三十二）
- (5) 『蘇軾詩集』卷十九
- (6) 『蘇軾詩集』卷二十
- (7) 『蘇軾詩集』卷四十七
- (8) 『東京夢華錄 外四種』、古典文學出版社、一九五六年十一月
- (9) 「與蔡景繁」第六簡、『蘇軾文集』卷五十五

- (10) 『吉川幸次郎全集』第十六卷 清・現代篇、筑摩書房、一九七〇年七月（初出は「日本中國學會報」第十一集、一九五九年十月）
- (11) 『初學集』卷九
- (12) 『初學集』卷七十四
- (13) 「森春濤の悼亡詩について」〔新しい漢字漢文教育〕第三十五號、全國漢文教育學會、二〇〇二年十二月）
- なお、拙論において「春濤との間には先に觸れた槐南、孝子——後に『春濤詩鈔』『槐南集』の編者となる森川竹礫の妻となる——が生まれている。」としたが、入谷仙介氏のご教示により、孝子が春濤と妾伊藤織緒との間に生まれた子であることが判明した。訂正するとともに、入谷氏への感謝と、この場を借りて氏のご冥福を祈りたい。
- (14) 『春濤詩鈔』卷七
- (15) 『作詩作文之友』第十七號、益友社、一八九九年八月
- (16) 『春濤詩鈔』卷九
- (17) なお、注①入谷著十十一頁ではこの頃の春濤について、次の記述がある。
- 第一に彼はいやしくも漢詩人である。俳諧師や戯作者ではない。漢詩は先にも述べたように、理念的に時代にコミットすることを要請される文学なのである。それはまあ建前論にすぎないと、言えば言えよう。彼はそれを要請する濃密な雰囲気に取り巻かれていたはずなのである。彼の師、梁川星巖は、晩年、急速に政治に傾斜してあわや安政の大獄に連座する直前、コレラによる急死で救われ、妻紅蘭が身代わりに入獄した事は著名である。同じく大獄に連座して殺された頼三樹三郎、天誅組の拳兵に敗れて死んだ藤本鉄石は、交友の内にあつた。才女で和歌をよくした三度めの妻の清は、熱烈な勤皇派の支持者であつたといわれる。彼の身辺には上洛して政治にアンガジュマンせよとの圧力が常にかかつていた。（中略）嘉永安政の間に何度か京坂に遊んでおり、嘉永四年には江戸に下っているが、大獄から維新に至る激動の時期、飛騨高山、越前に遊んだほか、ほとんど名古屋を動かなかった。激動をやりすごしたと言わねばならぬ。春濤のような人物が、時局に対してこのような態度を取る時、単なる無関心でなく、それ自体に意義があると考えるべきであろう。
- 筆者はこの指摘に對して、概ね賛同するが、春濤がここで述べられている程、當時の勤皇派において重要な位置を占めていたか否かについては疑問を持っている。これについては、別の機會に論じたい。

- (18) 春濤が若き日に學んだ、尾張一宮の私學校である有隣舍所藏の線裝本目錄『有隣舍和裝本目錄』（一宮市立豊島圖書館、一九六八年十一月）所收の漢籍もそのほとんどが和刻本であることも、その裏付けとなろう。
- (19) 汲古書院、一九七六年十一月
- (20) 汲古書院、一九八〇年一月
- (21) 『長澤規矩也全集』第十卷 漢籍解題二、汲古書院、一九八七年十一月
- (22) 『清詩選選』『清詩選』は第8輯（汲古書院、一九七九年五月）に、『清百家絕句』『清十名家絕句』は第10輯（汲古書院、一九七九年八月）に收められている。
- (23) 國立公文書館所藏本（昌平坂學問所舊藏）を参照した。
- (24) 影印本（中華書局、一九七五年十一月）を参照した。
- (25) 影印本（廣文書局、一九六八年一月）に参照した。
- (26) 「發江戸留別枕山樂山晚菘諸君（江戸を發す 枕山樂山晚菘諸君と留別す）」『春濤詩鈔』卷六）なお、『下谷叢話』に「樂山は江戸の人服部氏。（中略）一は枕山の門人である。」とある。